

# 万葉集と古筆切

田 中 登

## 一

和本には、周知のように、人が手で書き写した「写本」と、印刷した「版本」（「板本」とも書く）とがある。万葉集や古今和歌集、また伊勢物語や源氏物語など、いわゆる文学作品というものは、江戸時代以前においては、もっぱら「写本」という形で読み継がれてきた。しかして、これらの文学作品が、印刷され、本屋の店頭で売られるようになったのは、江戸時代に入ってからのことである。更級日記の作者が、父親の任地である上総の地で源氏物語の本を入手したいと切望しても、その願いはけっして叶えられることはなかったが、それも道理。当時はそもそも本屋さんというものが、なかったのである。職業としての本屋が成り立つためには、同じ内容の本が、一定数常に安定して供

給される必要がある。そのためには、同一内容の本が印刷され、大量に出回らねばならない。本が印刷されてこそ、初めて本屋という職業は成り立つのである。

## 二

では、江戸時代以前において、この日本で印刷技術はなかったであろうか。いや、そんなことはない。文学作品ならぬ経典類は、早く奈良時代から印刷されてきたのである。現存する遺品としては、かの有名な百万塔陀羅尼を挙げることができる。お経は多くの僧侶にとって必要欠くべからざるものだから、印刷されたのである。その点、伊勢でも源氏でも、文学作品などというものは、それを読みた人が読めばよいわけで、それでは、本が印刷されるはずもない。万葉が読みたければ、万葉の本を持っている人か

ら借りてきて写せば、それでこと足りるのである。そういった世界においては、版本は必要ない。

### 三

ところで、版本と比較したときの写本の大きな特色はといえば、何か。それは同じものが、この世に二つとないことである。たとえば、三蹟で有名な小野道風が古今集を書いたとしよう。一度目には「さくらばな」と平仮名書にした箇所が、二度目には「桜花」と漢字で書くかもしれないし、一面の行詰にしたところで、一度目には七行で書いたところが、二度目には八行で書くということもありうるわけである。ことほどさように、写本というものは、同じ人が同じ作品を写しても、すべて同じというわけにはいかない。写すたびにどこか違っているというのが、写本の特徴なのである。

### 四

このように、同じものがまたとない見事な本を、オレもほしい、いや私もほしいと、みんなが欲しがったら、果たしてどうなるか。本は通常何十丁（和本の世界では頁のことを丁という）もの墨付から成っているのだから、これを一枚、一枚に分割したらどうだろうということになってく

る。かくして、書の鑑賞を主眼として、一枚一枚の紙片に分割されものを古筆切という。すなわち古写本の断簡である。

平安・中世には、美術的にも優れた典籍がたくさん作られたが、茶道の隆盛などと相俟って、室町時代の後半ごろから、古人の筆跡を尊ぶ風潮が盛んになるに従い、古筆切が数多く世に出まわるようになっていったのである。

一方、これが印刷本であったなら、どうであろうか。どんなに熱烈な漱石ファンがいたとして、漱石の初版本を一頁切り取って、それを愛蔵するなどということは、とうてい考えられないことである。

### 五

江戸時代、どれほど古筆の鑑賞がさかんであったかは、「古筆見」と呼ばれる、もっぱら筆跡の鑑定を職業とする人々が少なからず存在していたことに、思いをいたせばこと足りよう。彼らが一枚の断簡を前に、その筆者をだれそれと鑑定することを「極める」といった。その鑑定結果を「藤原行成」とか「藤原佐理」などと記した、短冊型の小紙片のことを「極札」という。今でも、「極付のファン・プレイ」だとか「極付の演技」などという時の「極め」とは、ここに由来する。

また、極札のようにちっぽけなものでは頼りないという向きには、もっと大きな紙を用意して、これを横長に二つ折りにし、折り目の方を下にして「右、だれそれに間違いない」などと麗々しく記す。こちらの方は、「折紙」と呼ぶが、現今でも「折紙付きの○○」などという時の「折紙」とは、この鑑定用語が基となっている。

## 六

では、古筆愛好家が苦勞して収集した品を、いったいどのようにして、保存・鑑賞していたのか。これには大体三つのやり方が考えられよう。

### 一、掛軸

### 二、貼交屏風

### 三、手鑑帖

一の掛軸は、いうまでもなく、茶席の床の間にかけて鑑賞するもので、通常、一本の軸に対して、一枚の古筆切を充てるわけで、これはいつてみれば、一点集中主義的な鑑賞法ということになる。だが、昨今の日本の住宅事情などが因となって、この掛軸という方法も、われわれの日常生活から、次第に疎遠になってきているのは、否めない事実である。

二の貼交屏風は、色紙や短冊などとともに、何十枚もの

古筆切をバランスよく屏風に貼ったもので、ひと度屏風の前に立てば、天平期の写経から、平安の歌切、鎌倉の消息切、室町の物語切と、そこには書の一大パノラマが展開しているわけで、まことに壯観というよりほかないが、これもまた昨今の住環境から、だんだんと姿を消しつつあるのは、さびしい限りである。

三の手鑑帖は、いつてみれば、今の写真アルバムのようなもので、帖仕立ての本に、何十枚もの古筆切を貼りつけたもの。一頁ずつ帖を繰りながら、次から次へと時代も書風も変化してゆく風景を眺めて楽しむわけで、これは大して場所塞ぎにもならず、現代人の日常生活にも、支障はあ  
るまい。

## 七

ある作品の古筆切が、いったいどれほど今日まで残されているかは、当該作品がかつてどれほど書写され、読まれていたかを示す、一種のバロメーターでもあるわけで、今、試みに、主要な古典作品の、平安時代の書写になる古筆切の種類を示せば、次のとおりである。

### 万葉集

### 七種類

### 古今集

### 約三〇種類（含、完本二点）

### 後撰集

### 五種類

拾遺抄 五種類

和漢朗詠集 約三〇種類（含、完本四点）

伊勢物語 一種類

源氏物語 〇種類

まず、目につくのは、伊勢や源氏などの物語と、万葉や古今など歌集類との落差であるが、これは、往時、伊勢や源氏が読まれていなかったというわけでは、けつしてない。この二つの物語が後続の物語に与えた影響や、新古今歌人に本歌取りの素材を数多く提供した点などを考慮に入れてみれば、ただちに分かることであろう。結論から先にいえば、物語文学などというものは、当時社会的な評価が非常に低かったということである。このことに關して参考になると思われるのが、世尊寺伊行が著した『夜鶴庭訓抄』の次のような発言であろう。

物語は、手書き書かぬことなり。人誂ふとも、とかくすべりて、書くべからず。

要するに、能書家たるもの、物語などの書写に、けつして筆を染めてはいけない、というわけである。明治以前、この日本において、真に文学という名に値するものは、作者名を伴って作品が公表される、漢詩と和歌とだけであった。その結果、たった一枚の断簡となつても愛好家が所持していたと考えるほどの優れた筆跡の本は、物語類には

きわめて少なかったとみるべきであろう。

## 八

さて、万葉集の平安書写の古筆切だが、昔から五大万葉といつて、愛好家ばかりか、研究者にも大いに珍重されてきたのは、次の五点である。

- 1 桂本万葉集（断簡は梅尾切という）
- 2 藍紙本万葉集
- 3 元曆校本万葉集（断簡は有栖川切とか難波切という）
- 4 金沢本万葉集
- 5 天治本万葉集（断簡は仁和寺切という）

だが、これがすべてというわけではけつしてない。今、抄出本は別としても、平安書写のものに、伝藤原行成筆金砂子切万葉集があり、伝源俊頼筆尼崎切万葉集がある。

以下、いささか縁があつて、ほんの一時、私が愛玩する機会を得た、万葉集の古筆切について記してみたい。

## 九

まずは、尼崎切（卷末図版一参照）から。伝称筆者は源俊頼となつているが、これは認められない。切の形態は古筆の世界でいうところの四半切。すなわち縦長長方形だが、どちらかというところ、横の長さに比して縦の長さが目立つ冊

子本。雲母引き料紙を使用しているところに特徴がある。万葉集は卷十二の断簡。平仮名別提調。

ごく大雑把なところでいうと、この万葉仮名の読み（訓）が、平安時代のもは、平仮名別提調形式を採っており、それが鎌倉にまで時代が下つてくると、このような贅沢な料紙の使用法は許されずに、片仮名傍訓形式のものへと移つていくわけである。

尼崎切は、近年卷十六がほぼ完全な形で出現し、その書風が卷十二の断簡と違つて、鎌倉風であるところから、尼崎本全体を鎌倉の書写とする向きもあるようだが、このような訓の提示の仕方からも、平安の書写と見て差し支えないものと思われる。

それから、平仮名の読みを一首二行書にする際、必ずしも五七五で一行、七七で一行という、分ち書きの形式を採らず、四句目の七の一部を一行目の下に記す、いうなれば続け書形式を使用している点からも、この尼崎切は古い書写形態とみられる。

最後に、尼崎切（本）の本文の系統は、書写が古いだけあつて、当然のことながら非仙覚本系である。

## 一〇

次に、伝藤原為家筆後京極様切（卷末図版二参照）。四

半切で、万葉集は卷七の断簡。大振りな文字で、ゆつたりと一面に五行を記す。「天の海に雲の波立ち…」という、万葉でもとびきり有名な歌の箇所である。鎌倉時代の古筆切の例に違わず、片仮名傍訓形式で、非仙覚本系統。

ただ、「後京極様切」という切名については、いささか注釈が必要であろう。書道史の方では、「書流」という概念があるが、これは時代を超えて伝えてゆく書の型のことをいう。たとえば、「定家様」なら、肥瘦の差の激しい、まことに個性的な藤原定家の筆跡を慕うあまり、鎌倉時代後半から室町時代、そして江戸時代へと、綿々と継がれていった定家風の書のことをいう。

同様にして、「後京極様」とは、歌人として、また書家として名の聞こえた後京極良経の力強い書法をよしとしてこれを祖と仰ぎ、鎌倉初期から後期にかけて流行した書の型の流れをいう。今、具体的な人名を挙げれば、藤原家隆・藤原為家・藤原為氏・冷泉為相などがこの派に属す。

それで、この後京極様切という名で親しまれている万葉集の断簡も、極札には藤原為家という名が記されており、為家は右に記したように、書流としては後京極様（流）に属するので、伝称筆者と切名との間に何ら矛盾はない。ただ、この後京極様切を書物などで紹介する際、伝称筆者の為家の方を、ともすれば省略することが多いので、具合が

悪い。たとえ伝称といえども、為家の名も是非とも記しておいてほしいものである。これは日頃古筆の調査に従事している立場のものからの、切なる願いである。

一

次いで、伝中臣祐春筆春日本万葉集切（巻末図版三参照）。懐紙の歴史上、一品経和歌懐紙、熊野懐紙と共によく知られた春日懐紙の、その紙背を利用して書写されたもの。懐紙の作者には春日社の神官および興福寺の僧侶などが名を連ねている。形態は四半切で、片仮名傍訓。

この春日本万葉集切は、古筆切としては珍しく書写奥書の部分伝わっており、その文言は、次のとおり。

寛元元年八月八日書写之 祐定〔巻六〕

寛元二年三月九日書写之 祐定〔巻二十〕

寛元元・二年とは、西暦でいって一二四三・四四年のこと。したがって、これも仙覚本成立以前の本文を伝えていることになる。

書写者の祐定はまた春日懐紙の作者でもあるが、万葉集を書写したとき、四十六・四十七歳。かように書写者と書写年次とが明確に知られる古筆切は、その数けっして多くはないが、このことは万葉の研究史の点からも、貴重な資料とすべきであろう。

ところで、右に述べたような事情で、春日本万葉集切の筆者は、祐定と知られたのであるが、江戸時代の古筆見の記した極札には、祐定ならぬ祐春の名が記されていることは、この際、十分注意してよいことかと思われる。なぜなら、最初にこの春日本万葉集切の現物に接する人は、この極札をたよりに古筆切の正体（いったい何という名の切なのか）を追求していくわけだから、その時解説に、祐春の名が見えないと、途方に暮れてしまうことになりかねないからである。

近年刊行された『和歌文学大辞典』（古典ライブラリー、平成二十六年）の春日本万葉集切の項をひもといてみると、それは田中大士さんの執筆になるものだが、冒頭一番「伝中臣祐春筆」と記してあって、まさに我が意を得たり、との感を強くした次第である。

一一

最後に、伝尊円親王筆金沢文庫本万葉集切（巻末図版四参照）を。該断簡は金の枠罫のある料紙を使用。片仮名傍訓で、書写年代も鎌倉の十四世紀ぐらいにまで下るだけあって、本文は仙覚の文永本系。

この切の特色は何といっても、縦が三〇センチを超える超大型本である、という点に尽きよう。われわれ古筆を

やっているものからすると、おおよそ縦の寸法が三〇センチを超えるとなると、もとは卷子本であったと判断するわけだが、この金沢文庫本は、そうではなく、超大型の冊子本であることが、近年冷泉家の時雨亭文庫から出現した巻十八の完本の存在によって明らかとなった。

この金沢文庫本万葉集に匹敵する大きさの冊子本を他に求めると、蓬左文庫の尾州家本源氏物語と、冷泉家の文永本新古今集などの存在が挙げられるが、これはけっして王朝貴族の趣味ではない。なぜなら、私自身は冷泉家の平安書写の私家集をたくさん調査する機会に恵まれたが、それらの多くは縦二〇センチ前後の小型の冊子本であった。このことからすると、右に挙げたような超大型の冊子本というものは、時代も鎌倉の、そして東国地方の武家の趣味に合わせて制作されたものと考えられるのである。

ところで、金沢文庫本万葉集の、卷子本に改装された巻一は、筆跡が他巻と異なり、飛鳥井雅世（一三九〇〜一四五二）の筆になるとされているが、実際、雅世の署名入り短冊などと比較して、この説は認められよう。このように、一つの本に時代の異なる筆跡の巻が混在しているのは、当初の巻一が早くに失われ、その部分を、後になって補った、つまりは補写本と見るべきであろう。

以上、平安・鎌倉に書写された万葉集の古筆切をいくつかアト・ランダムにみてきたわけだが、私が常々不思議に思うのは、古今集や朗詠集などは、平安のものよりは、鎌倉のものが、鎌倉のものよりは室町のものがと、時代が下がるにつれてその種類も数も倍加してゆくというのが普通であるが、万葉に限っては、平安のものが七種類なら、鎌倉のものもせいぜい六、七種類止まりと、時代を下げてみても、いっこうにその数が増えていく気配が見えないことである。これはいったいどうしたことか。万葉仮名というものが本を書写するのを妨げているのか、それとも片仮名傍訓という存在が本の見栄えを悪くしているのか、いずれにしても、これは万葉の享受史という点から、まことに興味深い問題といえよう。

右二首  
不相然將有主梓之使予谷毛待八全予言  
あはれもむじつはありんかまはけはあはれ  
あはれもむじつはありんかまはけはあはれ  
將相者千猶雅念憐圃人眼千々感作衣居  
あはれもむじつはありんかまはけはあはれ  
あはれもむじつはありんかまはけはあはれ

図版一 尼崎切

推許  
詠天  
天海舟雲波音船里林舟榜浪  
右一首標本朝人磨詩本

図版二 伝藤原為家筆後京極様切

右一首治部卿船主  
若月村電錢但鳥案察使柳金良磨朝寔予言  
砂登河乃溪有相幸之麻之文列奉侍信堅寸全之命在香  
立別君於伊麻尼波之寺嶋詩人者礼有久作波比豆麻少年  
右一首右京中進大伴宿禰黑麻呂

図版三 伝中臣祐春筆春日本万葉集切

并物陳思  
人所見表比人小貝重紐用忽目大  
六然叶衣妹衣有羞服矣  
玉珠眼意重念二重衣一人非寐  
白細布我細法不絶間忽比為及相目

図版四 伝尊円親王筆金沢文庫本万葉集切